

新たな未来について考えることができるようになる。われわれは、批判を、言語に潜む偏った関心を暴露するものとしてではなく、言説そのものの実践的意味を明らかにするものとして捉えなければならぬ。この場合、その言説がウソかホントかということは、もはや問題にならない。むしろ、その言説が、進行中の関係性においていかなる機能を担っているのか、関心の焦点となる。では、動機と真実の問題をわきに置くとして、既存の言説は、いかなる社会的影響をもつのだろうか？

この種の社会的批判には、イデオロギー批判や文芸論的批判に向けられたのと同じ再帰的懐疑が向けられている。すなわち、その立場は、まさにその拠って立つ前提ゆえに、真ではありえない、という懐疑である。実際、社会的過程を根拠とするいかなる批判も、それ自身、社会的過程の産物である。しかしながら、イデオロギー批判や文芸論的批判の場合——イデオロギー批判そのものがイデオロギーの表現であり、テキストの脱構築そのものがテキストであるという再帰的閉鎖性——とは異なり、社会的批判は、無限の牢獄にとらわれることはない。なぜならば、社会的批判の場合、もう一つの言説空間、すなわち、新たな関係性の領域へと移行することができるからだ。すなわち、社会的批判にあつては、再帰的懐疑は、無限後退へ陥ることを意味するのではなく、代替可能な現実を認識し、さらなる関係性を求める声を獲得する手段なのである。この意味で、社会構成主義は、自身の理論を自己反省的に脱構築し、そのことによって、ある立場を顕揚しつつも、その立場から権威を剥ぎ取り、他の立場との会話を歓迎することができる（特に、Woolgar, 1988を参照）。

第1章でのパラダイムシフトの説明を考えれば、社会的批判が、暗黙裡に想定する存在論をあぶり出すことによって、言説のパラダイムを批判フェーズから転換フェーズへとシフトさせることができる。そのためには、人間科学に対する社会構成主義の可能性について、多くの対話が必要となる。そうした対話は、現在、自然科学から人文科学にまたがる、多くの著作に表れているが、その共通テーマは、批判を超えて、科学を再構築することにほかならない。

## 第5節 社会構成主義の前提

以上述べてきた議論は、どのような特徴をもっているのだろうか？ 社会的批判の中心的前提を研ぎ澄ますならば、社会構成主義に基づく知識の理論はいかなるものになるのだろうか？ 科学的実践にはどのような意義があるのだろうか？ 社会構成主義の前提は、個々の社会構成主義者によって微妙に異なるし、前提を明示し固定してしまうと対話の機会が閉ざされてしまうとして、あえて前提を明示しようとしない論者もいる。しかし、社会構成主義の前提を、暫定的に整理して提示することには、重要な意味があると思われる。なぜならば、そうすることによって、われわれは、現時点における、社会構成主義の前提を把握し、連帯と論争の資源を位置づけ、考察をさらに進めるための前線基地を築くことができるからだ。社会構成主義の中心的前提は、次の五つに整理することができる。

1、世界やわれわれ自身を説明する言葉は、その説明の対象によって規定されない。われわれが「それが何であるか」を表現し、コミュニケーションするとき、そこでいかなる音声、記号、身振りが使用されるかについては、何の必然性もない。この第一の前提は、部分的には、言語の対応理論や、観察から一般命題を導出する帰納論理を打ち立てることの不可能性に基づいている。あるいは、この前提は、能記と所記の関係が恣意的でしかありえないとする、ソシユール (Gaussire, 1983) の議論に多くを負っている。さらに、世界や人々についての説明が、中核的命題群にいかんにか依存し、かつ、当の中核的命題群にいかんにか影響を与えるかを示している点で、記号論的分析や文芸論的批判を直接的に取り入れたものでもある。あるいは、ある解釈を他の解釈よりも優れていると認定する、科学の社会的過程や社会的条件に焦点を当てる試みとも軌を一にしている。最もラディカルに言えば、この前提が言わんとすることは、われわれが状況を記述するにあたって、原理的な制約は何もない、ということだ。すなわち、根源的なレベルにおいては、科学は「何でもあり」なのである。しかしながら、原理的に何でもありだからといって、実際に何でもあり、というわけではない。ここで重要となるのが、次の第二の前提である。

2、世界やわれわれ自身を理解するための言葉や形式は、社会的産物である——すなわち、歴史的・文化的に埋め込まれた、人々の交流の産物である。社会構成主義にとつて、記述や説明は、あるがままの世界の産物でもないし、個人の遺伝的・構造的傾向によって決定されるものでもない。そうではなくて、それらは、人間行為の調整の産物である。言葉は、進行する関係性の文脈の中でのみ意味をもつのだ。ショッター (Shoetter, 1984) によれば、言葉は、個人の行為の結果でも個人の反応の結果でもなく、共同行為の産物なのである。あるいは、バフチン (Bakhtin, 1981) によれば、言葉は、本質的に、「人と人の間にある」。このことが意味しているのは、理解することは、ある反復的な関係性のパターンに参加すること、あるいはこう言つてよければ、伝統に参加することだ。すなわち、何らかの関係性を維持することによってのみ、われわれは意味を理解することができるのである。かくして、世界やわれわれ自身についての理解は、あらゆるとき、あらゆる場所で制約を受けている。

概して、文化的伝統は、言葉が十分に根拠をもつており、あるがままの世界を反映しているかのように見せることを可能にしてもいる。すなわち、理解の形式が十分持続的で、その形式だけが「義的に使用されるのであれば、その理解の形式は、「客観的」という看板を獲得し、メタファーではなく「文字通り正確な」という感覚を与えるだろう。あるいは、シュッツ (Schutz, 1962) に従えば、理解は、文化に沈黙していく——すなわち、自明の秩序の構成要素となっていく。しかし、「伝統を通しての真実」を強調することは、言語が埋め込まれている関係性を考慮に入れなければ、不完全である。なぜならば、言説を具体化するのには、単に持続性と一義性だけではなく、そうした言説を部分として含む、全体的な関係性だからである。例えば、「正義」や「道徳」(のような、高度な曖昧性を含む言葉) について深い関心を維持できるのは、それらの言葉が、より一般的な関係性のパターンに埋め込まれているからである。われわれが日々行っている精巧な社会的手続き——日常レベルでの非難と寛容、公的レベルでの裁判など——においては、「正義」や「道徳」といった言葉が中心的役割を担う。これらの言葉を取り去ると、こうした手続きの全体が崩れてしまう。こうした慣習的な手続きの中にとどまることこそが、正義と道徳が達成可能であることを知ることにはかならない。

同様に、科学の世界では、透徹した客観性という感覚がもたらされる。すなわち、「モノ」「プロセス」「出来事」を表す言葉の配列を選択し、その記述言語が適用されるケースについて合意を得ることによって、「客観的妥当性」の感覚を刷

物として生み出すような、会話的世界が形成される (Shorer, 1938)。つまり、科学者は、様々な状況における様々な行動パターンを、「攻撃行動」「偏見」「失業」などと呼ぶであろうが、それは、攻撃や偏見や失業が「その世界に」存在しているからではなくて、これらの言葉を使うことによつて、様々な行動パターンを、社会的に有意味なやり方で指示することができるからである。かくして、科学者コミュニティは、例えば、「攻撃の本質」について合意に達し、そこで得られた結論を「客観的」と呼ぶことを正当と感ずるのである。しかしながら、指示対象と、それを確立する社会的過程を切り離してしまえば、単なる形式主義に墮すのみである。

以上の主張は、もう一つの重要な論点とも結びついている。一般に言われるように、科学理論の価値は、何よりも、予測力にある。科学の能力はあるがままの真実を明らかにすることにありとするとする経験主義者に反対する道具主義者 (instrumentalist) でさえも、予測の有用性については信じて疑わない。すなわち、予測力に優れた理論がよい理論である、というわけだ。自然科学に比べれば、十分な予測力に欠ける社会科学の各分野でさえも、理論が信頼されるのは、応用力があるため、すなわち、様々な実践的場面に適用できるためである。「よい理論ほど実践的なものはない」というクルト・レヴィンの言葉は、自明の理とされている。しかし、ここでの議論が示しているように、理論そのものは、予測もしないし、その適用条件を定めもしない。理論命題そのものは無内容であり、「具象世界」における意味を欠いている。したがって、理論そのものからは、その理論をどのような具体例に適用して予測すればよいのかは、決して導くことはできない。理論は、科学者コミュニティにとつて、「予測の技術」を發展させたり、何が「応用」かについて協議する際の、非常に貴重な道具なのである。予測や応用が言語で形成され、コミュニティに共有されるのであれば、理論は欠くことのできないものである。しかし、攻撃、利他性、偏見、摂食障害、失業などについての予測は、それらの言葉を当たり前に使用している関係性の中に参加していなければ、ただの言葉遊びにすぎない。すなわち、学術雑誌、本、スピーチなどで、抽象的で普遍的な理論を伝えるだけでは、予測や応用に関しては、実践的にはほとんど役に立たないのである。<sup>10)</sup>

3、世界や自己についての説明がどの位の間支持されるかは、その説明の客観的妥当性ではなく、社会的過程の変遷に依存して決まる。すなわち、世界や自己についての説明は、それが記述し説明しようとしている世界の変化とは関わりなく、

支持されることもある。逆に、それらの説明は、われわれが世界の不変的性質だと考えているものとは関わりなく、廃棄されることもある。実際、記述や説明の言語は、それが指示する現象とは関わりなく変化しうるし、指示する現象が変化しても、理論的説明が必然的に変化するわけではない。この命題は、クワイン・デュエムの仮説——「言外の補助的命題をほとんど人付け加えていくことにより、理論は、そうでなければ理論を棄却する根拠となつたであろう多量の観察にもかわらず、支持され続ける——に基づいている。この命題は、パラダイム変化期で科学的知識がたどる社会的過程を言い当てている。さらに、実験室における意味的交渉を強調する、科学的知識の社会学からも多くを得ている。この命題は、さしあつて、社会構成主義が「科学の進歩」をどのように捉えるかを述べたものである。この命題から明らかのように、方法論的手続きは、いかに厳密であろうと、原理的に科学的記述や説明の言語を矯正する役には立たない。言い換えれば、前章で詳しく述べたように、方法論は、競合する科学的説明に裁定を下すための装置などではない。ポリテクニカルに言えば、われわれは、文化の中に存在するもう一つの声、すなわち、受容可能な存在論、認識論、それに伴う方法論を欠いていたために、長い間拒否されていた声に対して、ドアを開く必要がある。そのような声は、必要なデータがないからといって、黙殺されてはならない。

ただし、ここでの議論は、次のような危険な結論を導くものではない。すなわち、伝統的方法論は、科学的記述とは無関係であり、廃棄しても科学的著作の全体に影響を与えないことはなく、科学者の信頼性や科学的営みの社会的価値とは何の関係もない、などと主張するものではない。ここで主張していることは、方法論は、ある記述や説明が他のものよりも優れている（「より客観的」であり、「より真実」に近い）ことを、文脈から離れて超越的に保証することはできない、ということだ。しかしながら、科学者コミュニティの内部では、実証的方法是、主張が真実であること、結論に信頼がおけること、調査者が誠実であること、科学的営みが社会にとつて意味があることを示すために使用されるし、現に使用されている。上述のように、科学者コミュニティは、きわめて強固な存在論——ただし、あくまでもローカルな存在論——を作り出すことができる。すなわち、科学者コミュニティは、持続的な交渉、慣習的な実践、その実践への新参者の社会化を通して、「物事の本質」についての合意を達成する。そのコミュニティの内部では、命題は検証されることもあれば、反証されることもある。そして、モノや道具や統計的表現は、これらの実践に組み込まれているがゆえに（「データ」、「認識」の手段、信頼

性の指標を形成する)、検証や反証のプロセスに入り込むのである。このようにして、科学者は、フェロモン、短期記憶、人格特性などといった言説的リアリティが、本当に存在するのか、それとも存在しないのかを、確認することができる。また、その現象は存在しているのか、その現象は他のどんな現象と共に起すのか、その現象はより大きな母集団の中ではどれくらいの確率で生起するのか、などを確かめるために、方法的な改良をなすこともできる。さらに、科学者コミュニティのメンバーは、こうした出来事を報告することによって相互信頼を形成し、そのゲームのやり方が間違っていたり狡猾であったりする者を、合法的に罰したり排除したりする。科学のテキストには、こうした活動の結果が詳しく述べられている。要するに、科学というローカルな慣習の中では、予測と結果が実際に一致するのである。

4、**言語の意味は、言語が関係性のパターンの中で機能するあり方の中にある。**言語と事実の対応を否定する点で、前述の二つの批判はいずれも、言語の意味は、言語とは独立して存在する事実によって決まるといふ、単純な意味論を否定している。すなわち、命題の意味は、指示対象たる世界との規定関係から導かれるわけではない。しかし、社会的なフレームによって言語の意味論を再構成することができる。すなわち、指示行為を社会的儀式とみなし、その実践が歴史的・文化的に埋め込まれたものと考えれば、言葉の意味を意味論的に捉えることが可能となるのだ。ここで、意味論が、社会的語用論の派生物となることに注意しよう。意味論が役に立つのは、関係性があるからなのだ。

以上の点で、社会構成主義は、言葉の意味は社会的使用の産物であるとするウィトゲンシュタイン (Wittgenstein, 1953) の考えと、軌を一にしている。ウィトゲンシュタインによれば、「言語ゲーム」——と彼は比喩的に呼ぶ——の中で、すなわち、その言葉が進行中の関係性のパターンの中で使用されるあり方を通して、言葉が意味を獲得する。例えば、「打者」「投手」「ベース」「ホームラン」といふ言葉は、どれも、野球というゲームを記述する際に欠くことができない。常識的には、野球というゲームは、記述行為に先だって存在しており、ある記述の正確さには優劣がありうる——どう見ても「ボール」の球を「ストライク」と判定した審判が、ただけ口汚く罵られるかを想像してみれば、このことは自明だろう。しかし、ウィトゲンシュタインに言わせれば、野球を記述する言葉は、野球とは切り離された記述詞ではなく、それ自体が野球を構成する要素である。例えば、投手が投手であるのは、ゲームの規則に従っているからにはかならない。実際、言葉が意

味を獲得するのは、その言葉がルールの内部でいかなる機能を果たすかによる。すなわち、「ゲームを記述する」という行為は、ゲーム自体の内部で、関連する言葉が前もって配置されていることの派生物なのである。「では、この言語のその言葉は、何を意味するのか？」とヴィトゲンシュタインは問う。「もちろん、その言葉が意味するのは、その言葉の使われ方である。もしそうでなければ、何がその意味を示すというのか（そのようなものはない）」(8)。同様に重要なのは、ヴィトゲンシュタインの生活形式という概念である。生活形式とは、個々の言語ゲームが埋め込まれている、より広範な社会的営みのパターンである。例えば、野球というゲームは、一般に、「レジャー活動」であって、仕事の領域とは区別されている。すなわち、それは、様々な伝統的慣習（例えば、賭け事や、息子を最初のゲームに連れて行く、というような）によって構成される、文化的な娯楽である。すなわち、ゲームにおける言葉の意味は、より広範な社会的パターンにおける、ゲームの意味に依存しているのである。

この観点——意味が、広範な社会生活のパターンに埋め込まれたミクロな社会的交換から生じるとする観点——は、社会構成主義にとって決定的に重要である。すなわち、このように考えることによって、科学理論を含む言語が文化の中で使用されるそのあり方に、関心が向けられることになる——様々な「言葉の配列の仕方」は、進行中の関係性の中でいかなる機能を果たすのか？ 社会構成主義は、ある説明が真実かどうか、妥当性があるかどうか、客観的であるかどうかは問わない。あるいは、理論からいかなる予測が導かれるか、その陳述は話者の意図や感情をどれだけ正確に反映しているか、発話がどのような認知的過程によって可能になるのか、といったことも問わない。そうではなくて、社会構成主義にとっては、いかなる掘りの言葉も、関係性のパターンの一部なのである。すなわち、言語は、外部の領域——外的な指示対象や内的な衝動——をありのままに写す地図や鏡などではなくて、特定の生活モード、慣習的行為、支配—従属関係などの副産物である。したがって、真実の主張に対しては、次のことが問われなければならない——「その主張はどんな役に立つのか」「その主張が重要なものは、いかなる慣例においてなのか」「その主張により、どんな活動が促進され、どんな活動が妨げられるのか」「その主張により、誰が被害を受け、誰が利益を得るのか」。

5、既存の言説形式を吟味することは、社会生活のパターンを吟味することにほかならない。こうした吟味は、他の文

化集団に発言力を与える。中核的命題群を共有する共同体の中では、言葉と行為には確固とした結びつきがあるため、ある主張の「経験的妥当性」を吟味することができる。しかし、この吟味の仕方、科学においても日常生活においても有用ではあるが、本質的に非帰納的である——すなわち、評価の仕方そのものを評価したり、その評価がどのような世界を構築するのかを評価したり、その評価がより広範な社会生活といかなる関係にあるのかを評価する術をもたない。例えば、科学が、実験を通じて、科学的命題の信頼性や受容可能性を吟味することができるのは、科学者コミュニティが、理解を共有するコミュニティとして存在しているからにはかならない。同じことは、精神分析学や唯心論についても当てはまる。しかしながら、こうしたコミュニティ内部で通用している妥当性や望ましきの基準は、その基準自身が妥当で望ましいかの基準にはなりえないし、さらに重要なこととして、そうした基準にコミットすることが、関連する様々なコミュニティの人々の生活にかなる影響を与えるのかを評価する基準にもならない。だから、例えば、科学は、その霊的な価値を問うことはできないし、精神分析学は、本来、無意識のプロセスを信じることの文化的利点や責任について論じる術をもたない。あるいは、軍事戦略の用語や理解からは、戦争の道徳性を評価することはできない。

したがって、重要なのは、様々な中核的命題群を、その外側から批判的に吟味し、そうした中核的命題群が、より広範な社会生活にかなる影響を与えるのかを探索することである。すなわち、もし、われわれが、経済学、軍事戦略、生態学、心理学、フェミニズムなどの言葉を使って世界を構成するならば、文化は何を得て何を失うのだろうか？ これらのコミュニティの言葉や実践が増大すると、社会生活はどのように改善ないし改善されるのか？ ただし、こうした吟味をする際、外部の中核的命題群や実践が「正しい」わけではない。例えば、道徳的、政治的な憤りが、こうした問題に対する「最終的な回答」を与えるわけではない。しかし、そうした吟味は、本質的に、他の意味生成コミュニティの——あるいは、他の生活様式の——産物であるがゆえに、異なる意味生成コミュニティが参入するためのドアを開くことになる。もし、吟味が、それを注視する人々によって取り入れられるような仕方であり、コミュニケーションされるのであれば、関係性の境界はやわらぐだろう。かつては異質であった記号が相互に還流するようになり、かつては異質であったコミュニティが結びつきはじめる。こうして、吟味の対話は、人道的な社会に向けての重要なステップとなる。



## 第6節 社会構成主義に立った人間科学

以上述べてきた前提は、前章できわめて問題があることを明らかにした知識観、すなわち、「知識は個人の中の頭にある」という觀念に対する代案になりうる。われわれは、今や、これら社会構成主義の前提がもつ積極的な意味を明らかにしていかなければならない。社会構成主義の前提は、人間科学をどのように再構成するのか？ 何が求められていて、何が棄却されるのか？ 伝統的な経験主義者や保守的な科学者にとっては、社会構成主義の議論は、悲観的で、何の希望もないものと映るかもしれない。しかし、それは、科学の古臭い考えにしがみつき、真理、知識、客観性、進歩などの不明瞭な概念に固執し続けているからだ。われわれに言わせれば、伝統的な経験主義の概念は、視野が狭く、方法論が貧困で、表現力も乏しく、社会的にもほとんど役立たない。これとは対照的に、社会構成主義は、正しく推し進めていけば、人間科学の可能性を広げてくれる。その新たな可能性はさまざまな分野で芽を出し始めており、すでに新たな探求が始まっている。

本章の残りの部分では、社会構成主義の立場から生み出される優れた萌芽的な考えのいくつかを述べ、併せて、様々な伝統的研究を社会構成主義の観点から再検討することにした。社会構成主義の可能性を吟味するためには、前章で述べた、人間科学の視座の転換についての説明を想起するとよい。そこで私は、伝統を維持し、疑問視し、変更させる必要について論じておいた。これらをふまえた上で、様々な科学的実践について、以下の三つの観点から考察を加えることにする。すなわち、(1) 科学は、既存の制度や生活様式にいかなる貢献をするのか、(2) 科学には、どれほどの批判能力があるのか、(3) 科学には、文化を容れさせる力がどれほどあるのか、という観点である。もちろん、以下の分析は、一つの方向性を示唆するものにすぎない。というのも、あらゆる科学的実践は、社会集団が異なれば異なる機能をもつし、多様で矛盾する「意図せざる効果」をもつこともしばしばであるからだ。しかし、以下では、科学的実践をこのように整理することによって、科学のもつ機能や効果を強調することにした。

## (一) 安定した社会における科学的実践

最初に、比較的安定した状況下、あるいは、伝統的な伝統の下での、人間科学の可能性について考察しよう。まず、言語という形式について考えてみよう。言語は、言語自体が埋め込まれている関係性のパターンから分離不能であり、関係性のパターンの構成要素でもある。こうした言語は、普通、暗黙的存在論——「それが何であるのか」の目録——、および、暗黙の道徳律——「いかにあるべきか」の基準——を含んでいる。つまり、DNA分子を研究している生物学者にせよ、修正第1条を審議している最高裁にせよ、何が存在するのかについての前提が共有され、いかなる行為が適切なのかについての合意がなされていなければならない。そのような慣習なしには、生物学者のコミュニティも、最高裁というコミュニティも、存在しえないだろう。さらに、ローカルな対面的集団について言えることは、程度の差はあれ、国家レベル、大陸レベルにも当てはまる。日本文化とノルウェー文化を対照させて語ることができるのも、こうした慣習があるからにほかならない。

このように考えれば、人間科学は、既存の伝統に対して実質的な貢献を果たすことができる。具体的には、二つの主要な機能がある。すなわち、第一に、人間科学は、現在の生活形式を維持し強化するのに役立つ。第二に、人間科学は、伝統の中で、人々がよりよく生きることを可能にする。第一の機能は、理論的な言説、すなわち、科学による世界の記述や説明によって、十分に実現される。すなわち、人間科学は、明瞭で洗練された言語——特に、人間についての言語——を提供することによって、社会の支配的な中核的命題群、および、それに基づく実践に、実質的な影響を与えることができる。人間科学の中核的命題群は、人間行為にラベルを貼り、人々の成功と失敗の原因や行動の根拠についてユニークに語ることを可能にする。例えば、人間行為を個人の心的過程の観点から説明するならば、同じ行為を社会構造の観点から説明するのは大きく異なる実践が含意されることになる。すなわち、前者の理論からは、社会的逸脱者を非難し、罰し、治療するという実践が導き出されるのに対して、後者の理論は、そうした結果を生み出してしまったシステムの再編という実践を志向する。あるいは、学習理論は、暗黙のうちに、逸脱行動には行動プログラムの再訓練が必要であると示唆するのに対して、生得説は、逸脱的な気質の持ち主を隔離することを強調する。さらに、機械論的な理論は、個人の責任を否定する傾向にあるが、ドラマトゥルギー理論は、個人の主体的能力や自己コントロール能力をアピールする。重要なことは、いずれの場合におい

ても、理論的な言説が、ある重要な社会の考え方、および、それと結びついた生活様式を維持し強化する、ということである。

人間科学の第二の機能は、慣習的制約の中での適応行動を促進する点である。すなわち、人間科学は、相対的に安定した行為パターンや、ラベリングについての共通認識の可能性を前提として、政策の策定、その政策プログラムの実施、有用な情報への文化への流布を可能とするような予測を提供できる。例えば、文化が共有するリアリティの中で、人間科学は、学術的成功、精神分裂病の衰弱、精神疾患の比率、投票パターン、犯罪率、離婚率、学校の中退率、妊娠中絶の要求、製品の成功、GNPなどについて、比較的信頼のおける予測をすることができる——「治療」が達成されるようにセラピストをクライアントと結びつけたり、組織場面において組織コンサルタントが「問題を解決」できるようにしたりする。こうした予測の領域こそ、伝統的な経験主義が、最も重要な役割を果たした領域である。すなわち、サンプリングの手続き、記録装置、質問紙調査、実験、統計分析などといった行動科学の遺産は、予測力を高めるために有効利用できる。経験主義の伝統が持続し、人々がそれに価値を置き、指示規則が広く共有されている限りにおいて、そのような予測は有効である。

しかしながら、以上のことは、人間行動の一般理論の検証を続けようと主張しているわけではない。見てきたように、そのような研究は、正確で予測力のある理論を、経験的に間違っている理論と区別しようという、伝統的な根拠で正当化することはできない。そのような研究をしたところで、一般的な仮説を確認することもできないし、棄却することもできない。なぜならば、いかなる理論であれ、その真偽は、所与の文脈における意味連関によつて決まるからだ。同様に、仮説検証的研究の大多数は、社会的予測という要請にも応えることができない。なぜならば、仮説検証的研究は、たいてい、当該の理論の妥当性を証明するという目的で行われるからだ。つまり、そのような研究で注目される行動は、単に実験室における測定やコントロールに好都合という理由で選ばれているのであって、社会的には大して重要なものではない。例えば、ボタン押し、質問紙のマル付け、不自然なゲームでの成功、実験装置での成績などについていかによい予測をしようとも、そんなものは社会にとってほとんど関心を惹くに値しない。実際、このような研究に膨大な時間を費やし、莫大な数の被験者や被験動物を犠牲にし、国のお金を使い、出版のために骨を折る、キャリア・アップしていく（あるいは、しない）からといって、そうした研究が正当化されるわけではない。もちろん、仮説検証の一切を放棄せよと言っているのではない。ごく少数

ではあるが、統制された研究の中には、理論に表現力を与え、レトリカルな価値を与えるものもある。しかし、ここで強調したいことは、理論的言説こそ、おそらく、人間科学が社会生活にもたらすことのできる、最も重要な貢献であるということだ。

### (2) 慣習的思考を打破する科学的実践

社会の大多数にとって、慣習的に定義されるような公共財への貢献は、少なからぬ重要性をもっている。文化的価値は、あまりにも不安定で、あまりにも変化しやすく、常にそれに反する勢力を抱え込んでいるものだ。同時に、文化的リアリティが一枚岩であることはめったにない。われわれは、いわば、競合する中核的命題群の海を泳いでいるようなものなのだ——そこでは、ギリシャ・ローマ時代、キリスト教、ユダヤ教などから連なる言説の波が絶え間なく押し寄せ、全く異なる言説が混ざり合って、新たな（びつくりするような）言説の可能性を、絶えず生み出し続けている。だから、文化で特定のリアリティが支配的であったり、それに基づく実践が主流を占めていようと、必ず、マイノリティ集団——白らのリアリティが否定され、無視され続けるという苦しみを受け、前向きなビジョンをもちつつも、多数派の安定と神聖さを守るために黙殺されている集団——が存在しているのだ。

社会構成主義に立つならば、科学の言語は、ある種の行為を促進し、ある種の行為を回避させる、実践の装置にほかならない。したがって、科学者は、好むと好まざるとにかかわらず、あるいは、自覚的か否かにかかわらず、必然的に、道徳的・政治的唱導者であらざるをえない。科学者による価値中立の主張は、自分の研究が社会生活の様式を維持したり破壊したりしうることから、単に、目を背けているにすぎない。だから、社会構成主義は、自らの研究者としてのコミットメントを私的感情と切り離したり、事実と価値を区別しようとするのではなく、研究者としての全人的表現を求めめる。言い換えれば、よりよい社会を実現するような理論、方法、実践を重んじる。この意味で、社会構成主義は、社会で支配的なりアリティと、それと結びついた生活形式に挑戦する。以下、挑戦の主な形式を、三点にわたって考察していこう——すなわち、文化批判 (cultural critique)、内在的批判 (internal critique)、相対化の試み (scholarship of dislodgment) である。

おそらく、言説を重視する立場からは、現状を攪乱するための、最も直接的で広範に利用されている手段は、文化批判で

あろう。二十世紀の大部分において、実証を志向する科学は、倫理や政治に加担することを意図的に避けてきた。しかし、今や明らかなように、科学の価値中立性など空想にすぎない。すなわち、研究者は、常に、かつ必然的に、何らかの価値的基準に立脚しているのであって、良かれ悪しかれ社会生活に影響を与える。したがって、人間科学には、「自然の鏡」の受動的な手先になるのではなく、正当にかつ責任をもって、自らの研究を広めていくことが求められる。言い換えれば、われわれ人間科学者は、専門領域から「すべきである」という当為命題を消し去るのではなく、専門領域と関連する道徳的・政治的問題を理解可能にすべく、専門的スキルを積極的に活用しなければならぬ。社会的批判は、人間科学にとつてとりたてて新しいものではないが、こうした表現の重要な形式の一つである。精神分析学派と批判学派の伝統にある研究者は、精巧な社会分析が大きな影響をもたらす可能性を、早くから強烈に示した。その可能性は、行動主義の（あるいは、経験主義の）時代にはほとんど無視されていたが、一九六〇年代以降、きわめて多様な形をとつて、再び、開花し始めている。近年のカルチュラル・スタディーズの隆盛は、こうした動きの力強さを物語っている。こうした動きについては、第5章で詳しく述べる。

社会的批判は、重要な意味で、補完されなければならない。すなわち、社会的批判は、様々な対象を批判し、文化一般の常識の再考をせまるが、その反面、人間科学そのものを問はずとほしてはいない。しかし、人間科学は文化に影響を与える言語と実践を生み出しているのだから、人間科学に対する批判的評価もまた必要だろう。そこで、社会構成主義は、社会的批判に加えて、内在的批判をも強力に推進する。すなわち、科学者には、自らがいかなるリアリティを構成し、それがいかなる実践をもたらすのかを、監視し、批判し、疑問をぶつけることが求められる。内在的批判も、人間科学にとつては目新しいものではない。例えば、前章で述べたように、認知革命の出現には、行動主義の内在的批判が必要不可欠であった。しかしながら、われわれに言わせれば、この種の内在的批判の議論は、文化全体への価値という点からすれば、ほとんど重要性をもたない。なぜならば、こうした議論は、科学そのものの外側に立つことに失敗しているからだ。すなわち、科学に固有の価値観や、それが社会生活にもたらす意味は、全く問題にされていないのだ。ここで重要なのは、科学的現実を生成するのに加担する関心・価値観とは異なる関心・価値観を明らかにするような、批判の形式である。そうした批判の例は、イデオロギー批判の説明の部分でも述べておいたし、第5章でもさらに論じることにする。

次に、既存の学問領域にゆさぶりをかける、第三の形式について考察しよう。文化批判も、内在的批判も、特定の価値観へのコミットメントを大前提としている——平等、公平、葛藤低減、などのような。しかし、社会構成主義は、第三の探求をも要請する。すなわち、特定の価値観にしばられることなく、慣習的なものを打ち破るための探求である。いかなるリアリティであれ、それが物象化され、当たり前になれば、関係性は固定され、選択は閉ざされ、様々な少数意見は聞こえなくなってしまう。例えば、平等の存在を前提にすると、不平等に目が届かなくなってしまう。あるいは、コンフリクトが解決されると、そのコンフリクトの渦中にいる人々の苦しみは鈍感になってしまふ。このように考えると、相対化の試みは非常に重要である。相対化の試みとは、慣習的思考の呪縛から脱する試みである。ある意味で、文学における脱構築は、こうした試みのモデルとなる。すなわち、脱構築が、ある作品の中心的アポリアに取り組むとき、いかなる平明なテキストであれ、洗練された原理であれ、よく練り上げられた計画であれ、懐疑の対象となる。脱構築の試みが示しているように、明確でエレガントで説得力のあるテキストであっても、注意深く検討すれば、その根柢は破綻し、その論理は崩壊し、その意味も決定不能となる。

さて、脱構築的分析は、相対化の試みとして人間科学にとって有用であるが、よりレトリカルに強力な試みは、支配的な言説がいかに構成されているのかを示そうとする試みである。その典型が、修辭学的批判と社会的批判である。先述のように、修辭学的分析は、ある言説が、説得力、合理性の感覚、客観性、真理性を獲得するメカニズムに注視する。分析によって、メタファー、ナラティブ、意味の抑圧、権威へのアピールなどが顕わになれば、合理性や客観性はその支配力を失ってしまう。あるいは、言説の裏に潜む作為が仄づかれると、その言説の説得力は失われる。同様に、社会的批判が、真実の背後に潜む関係性のプロセス——交渉、権力の行使、政治力学、など——を分析することによって、その真実はもはや普遍的なものとはみなされなくなる。すなわち、時代と文化を超えて、事象を記述する「唯一の方法」と思われていたものは、ロイカルで特殊なものにすぎないとみなされるようになる。

相対化の試みは、他にもある。中でも特に注目し値するのは、文化的・歴史的な再文脈化である。はじめはローカルな価値観、前提、根柢であったものが、普遍的なものへと拡大するように思われることは珍しくない。実際、特定のコミュニケーションの価値観や、特定の科学の真実は、普遍性——あらゆる時代のあらゆる人々にとって、善であり真であること——をもつ

ものとされている。それに対して、特定の価値観と真実の背後にある文化と歴史についての研究は、そうした「普遍性」の主張を問はず契機となる。すなわち、文化人類学者が、他の文化集団のローカルなリアリティを探求し、異文化に固有の環境の内部では異なるリアリティが妥当であることを示すように、文化的・歴史的再文脈化は、われわれのもつ合理性の限界を明らかにしてくれる。例えば、ウィンチ (Winch, 1946) が、ゾンデイ・マジックの根拠を擁護するとき、彼は、同時に、西洋の科学を尊重し部族の魔術を軽蔑する西洋人の常識に対して疑問を投げかけている。歴史的再文脈化によっても、同様のことが達成できる。例えば、モロウスキー (Morawski, 1988) らは、心理学実験の解釈の変遷を追跡しており、また、ダンツィガー (Danziger, 1980) は、実験テーマの概念が歴史的事情に依存することを示しているが、そうすることによって、彼らは、方法論や研究テーマは確固たる普遍性をもつという考え方に挑戦しているのである。

### (3) 文化を変容させる科学的実践…新たなリアリティとリソース

人間科学には、文化的制度を維持する可能性とともに、それに対して反省的に疑問を投げかける可能性があることを述べてきた。最後に、人間科学の第三の可能性について考察していこう。それは、批判や攪乱を超えて、文化を変容させる可能性である。もし、現実や善といった概念が文化的構成物であるならば、われわれの文化的実践のほとんどは、等しく文化・歴史依存的とみなされるだろう。すなわち、自然なもの、普通のもの、合理的なもの、明白なもの、必然的なものすべてが、原理的には、変化に開かれることになる。批判や相対化の試みは、こうした文化的動乱にとって重要ではあるけれども、それだけでは不十分である。なぜならば、基本的に、これらは、批判対象の文化に寄生している——すなわち、これらの中核的命題群は、批判対象の文化に依存している——からだ。社会変革のためには、新たなビジョンと語彙、新たな可能性のビジョン、それらをまさに実現していく中で新たな方向性を打ち出していく実践が必要である。こうした変容は、伝統的な社会科学の土壌、すなわち、既存の理論と研究の枠組みにおいても可能であるかもしれない。しかしながら、伝統的な社会科学は、もっぱら、伝統的な中核的命題群の観点から理解されるため、いかに革新的であろうとも、伝統的立場を維持し続けることになってしまう。したがって、文化的変容は、新たな形式の科学的実践によってこそ、十全に実現できるように思われる。そこで、以下では、新たな科学における理論、研究、実践を考え、それがいかなる可能性をもつのかを考察していこう。

人間行動の概念は、人間関係を遂行するツールのようなものとして機能する。だから、社会変化の可能性は、人間行動に  
ついでの中核的命題群の刷新から生じるであろう。理解のための新たな言語が発達すれば、可能な行為の範囲が拡大する  
のだ。例えば、過去においても、無意識の動機についての言語が洗練されたために、法廷において被告が用いる戦略も洗練  
された。また、内発的動機の語彙が豊かになったために、教育計画が強化された。あるいは、家族システムの理論が発展し  
たために、個人的苦痛の治療法が増えた。私は、「もう一つの社会心理学」(Gergen, 1992a)の中で、生成的理論という概  
念を提唱した。生成的理論とは、文化で自明視されている諸前提とは対立し矛盾する視点を提供し、新たな中核的命題群を  
切り開いていくような理論のことである。例えば、フロイトやマルクスの理論は、間違いなく、二十世紀において最も生成  
的な理論であった。すなわち、どちらの理論も、文化の支配的前提に挑戦し、新たな行為パターンを生み出した。しかしな  
がら、これらの理論は、今日ではもはや生成力を維持してはいない。生成力を維持するためには、これらの原典の革新的で  
型破りな解釈が必要であろう(例えば、フロイト理論をラカン派的に再解釈することによって、精神分析理論は、ポスト構  
造主義の対話に参入することができる)。また、影響力の点ではやや劣るものの、例えば、ユング、ミード、スキナー、ピ  
アジェ、ゴフマンの理論は、多くの点で生成的であった。さらに影響力は限定されるものの、例えば、ギアツ(Geertz,  
1973)によるバリの闘鶏の解釈や、フェスティンガー(Festinger, 1957)の認知的不協和理論は、重要な生成力をもってい  
た。どの理論も、程度の差はあれ、既存の中核的命題群を変容させ、さらに重要なこととして、科学的・文化的リソ  
スを拡張した。

しかし、一方では、これらの理論がもつ保守的な性格も忘れてはならない。すなわち、これらの理論は、既存の文化的伝  
統を支えるとともに、その文化的伝統からレトリカルな力を借りている。より明確に言えば、理論は独特な社会行為であり、  
したがって、特定の人間関係を促進する。例えば、上記のそれぞれのケースにおいて、著者は、知識人としての権威を活用  
し、権威のハイアラーキーを維持している。また、批判は著者個人に対してなされるが、そのことは、個人が思考の源泉で  
あるという人間観を維持している。あるいは、高学歴のエリート主義文体が使用され、低学歴の人々が用いる慣用語は、不  
適切で劣ったものとして排除される。さらに、それぞれのテキストはテーマを物象化しており、レトリックよりも現実の方  
が優位であることを主張している。このように見てくるならば、文化的変容への道のりは、学術的表現形態の転換をも含ま



なければならぬ。すなわち、人間科学が学術的表現形態の実験をすることによって——例えば、伝統的な著述スタイルに挑戦し、学問カテゴリーの壁を打ち破り、映像や音声テキストに挿入する、など——、学者、学会、教育の本質、ひいては、人間関係の可能性が変容することになる。

以上のことからわかるように、人間科学は、新たに型破りな記述スタイルに価値を置き、そのような記述スタイルを取り入れていかなければならない。フェミニズムは、そうした動向の先頭に立っている。例えば、フランスのフェミニストであるイリガライ (Irigaray, 1974) とシヌー (Cixous, 1986) が示しているように、たいていの学術的著作の記述スタイルは、男性中心的 (直線的、二値的、無感情) である。それに対して、フェミニズムは、新たな表現形態を模索している。それは、彼女らが、本源的な女性意識にとってより適切であると考える表現形態である。また、文化人類学は、エスノグラフィの西洋的慣習に疑問をもち、その慣習こそがある種の帝国主義を構成すると論じている。そこで、例えば、「研究対象者」を研究協力者としてエスノグラフィに登場させる、研究対象者の自叙伝としてエスノグラフィをまとめる、エスノグラフィを研究者の母国文化を批判するために用いる、エスノグラフィを詩歌に変える (こと) によって、エスノグラフィが事実ではなくて表現技法に基づいていることを明らかにする)、などの実験が試みられている。他の実験的な試みとしては、マルケイ (Mulkey, 1985) は、同じ著作の中に複数の筆者がいる記述スタイルの可能性を探求し、メアリー・ガーゲン (Gergen, 1992) は、ポストモダンの草分け的ドラマ「パラサイトカフェでの死 *Death at the Parasite Cafe*」を書き、フォー (Fohl, 1992) は、批判的な社会分析を遂行するために、理論、フィクション、自叙伝、写真のコラージュを展開している。さらに、研究者の中には、論文ではなく、映画という表現形態を活用する人も登場してきているが、このことは明らかに未来への大いなる挑戦と言える。

次に、理論的記述の問題から、研究方法論の問題に目を転じてみよう。文化を変容させようと思うならば、研究の主たる目的は、新たな行為様式の可能性を生き生きと描くことになる。すなわち、研究は、新たな行為の可能性に、実質的なイメージを与えるものでなければならぬ。すでに述べたように、従来の実験室実験でさえも、そのために役立つ。例えば、ミルグラム (Milgram, 1974) が行った服従についての野心的研究は、いかなる「仮説を検証」しているわけでもない。しかしながら、「命じられた悪」の可能性を読者に意識させ、ショックを与えるという点で、この迫真の研究は、上下関係はど

ここまで望ましいのか、義務はどこまで果たすべきなのかといった議論を煽るものである。

このように、従来の実験室研究も文化を変革する力をもつてはいるが、それらは、その伝統的記述スタイルと相俟って、文化を保持する傾向の方が強い。すなわち、実験室実験は、新たな行為を例示する可能性をもっているけれども、人間行動の機械論的モデルに依拠し、被験者を疎外し、結果をコントロールすることによって、その可能性を台無しにしてしまっている。したがって、よりラディカルな変革のためには、従来とは異なる研究手続き、すなわち、従来とは異なる価値観や見解に立脚する方法論が求められている。そして、新たな研究手続きが明確になれば、人間関係の新たなモデルが必要になる。こうした動きは、今や、人間科学の様々な領域で生じ始めている。従来の研究にまつわるイデオロギー的問題や知的問題の多くを乗り越えようとする試みには、例えば、次のようなものがある。すなわち、定性的研究の探求 (Denzin and Lincoln, 1994)、解釈学的探求 (Packer and Addison, 1989)、対話的方法論 (Mergen, 1989)、協同的探求 (Reason, 1988)、自伝やライフ・ヒストリー (Bertaux, 1984; Polkinghorne, 1988)、語り分析 (Brown and Kreps, 1993)、肯定的評価法 (appreciative inquiry) (Coopertier, 1990)、社会的介入としての研究 (McNamee, 1988)、生きた研究としてのフェミニズム研究 (Fonow and Cook, 1991) などである。いずれのケースにおいても、新たな研究方法論によって、新たな形式の社会生活が提起されている。

最後に、研究実践の領域にも注目しておく必要がある。セラピスト、カウンセラー、組織コンサルタント、教育者らは、多くの意味で、研究者よりも文化に対してはるかに大きな影響力をもっている。すなわち、こうした実践家の実践は、学者の難解な著作よりも、日常の人間関係に深く直接的に入り込む。つまり、彼らは、文化を変容させる大きな潜在力をもっているのだ。とりわけ重要なのは、社会的モデルとしての役割である。例えば、セラピストがクライアントとの新たな相互作用を発達させるならば、文化はそのやり方を、困っている人を助ける際の新たなやり方として採用するかもしれない。あるいは、コンサルタントが、(権威主義的解決ではなく) 組織の階層を縦断する対話を作り出すとき、彼らは、暗黙のうちに、相互依存的解決というリアリティを作り出している。さらに、教育者が、共同による評価様式を追求するならば、生徒と先生との新たな関係を準備することになる。つまり、実践家は、既存の制度の単なる奉仕者でもなければ、象牙の塔で作られた論理や「知見」の奉仕者でもない。そうではなくて、彼らは、大きな変化に向かっている可能性を秘めた行為者なのである。

私の考えでは、これからの十年は、研究者が実践家の技能を学ぶ時代になるだろう。

要約しよう。社会構成主義に立った人間科学に対して、伝統的な研究実践も価値ある貢献をなすことができる。しかしながら、その貢献は、きわめて限定されたものである。したがって、社会構成主義は、従来の研究実践を拡張しようとする。研究の革新のために重要なのは、次の三点である。第一は、脱構築である。ここでは、真実、理性、善についてのあらゆる前提が疑問に付される——さらに、疑問そのものの前提も疑問に付される。第二は、民主化である。ここでは、科学の重大な対話に参加する人々の範囲が拡張される。第三は、再構成である。ここでは、文化の変容に向けて、新たなリアリティと実践が作り上げられる。このような努力によって、人間科学を、社会生活の周辺に位置する現状から、文化的探求の中心へと推し進めること、それが私の希望である。

## 注

- [1] 古典的著作としては、Adorno (1970)、Horkheimer and Adorno (1972)、Marcuse (1964) がある。こうした視座を、現代の学問にまで拡張したものととしては、例えば、Parker (1992)、Sullivan (1984)、Thomas (1993) を参照。
- [2] 例えば、Butler (1990)、Fine (1993)、Harding (1986)、Haraway (1988) を参照。
- [3] 例えば、Clifford and Marcus (1986)、Fabian (1983)、Mitchell (1982)、Rosen (1987)、Saïd (1979, 1993)、Schwartz (1986)、Slam (1987) を参照。
- [4] この結びつきは、Athusser and Balibar (1970) において明示されている。
- [5] この観点を具体的に示したものととして、Pinder and Bourgeois (1982) を参照。
- [6] モタニズムとポストモタニズムの区別については、Lyotard (1984)、Harvey (1989)、Turner (1990) を参照。社会科学におけるポストモタニズム的転回については、Rosenau (1992)、Kvale (1992)、Seidman and Wagner (1992) を参照。ポストモタニズムの学問と社会生活の変容との関係については、Connor (1989)、Gergen (1991b) を参照。
- [7] Nencei and Pels (1992) の編著「知識の構成：社会科学の権威と批判 Constructing Knowledge: Authority and Critique in Social Science」は、こうした論争の激しさをよく示している。例えば、文化人類学においてテキストが重視をされていることに対して、新マルクス主義の文化人類学者であるフリードマン (Friedman, 1991) は、次のように述べている。「テキストの実験まで、ポス

トモダンのマイノリティのせいだけにすぎない……彼らは皆、「制度的権力」を行使できる立場にあるし、少なくとも、そうした立場をコントロールする集団に属している。……われわれが耳にする声は、権力の象牙の塔に巣くう、陳腐で退屈な連中の声だ……すなわち、個人的なナルシズムと学問的なナルシズムが混ざっていることが明白な、エリート的な皮肉だ」(p.98)。あるいは、Annelis Moors (1991) は、「フェミニズムの視点から次のように述べる。「女性にとつて問題となっているのは、ポストモダニズムによる差異の受容が、隠された事項をも含むかどうかであり、究極的には、女性の正当性要求に対して権力をもつ側の人々が無関心であるかどうかである」(p.127)。

[8] ある意味で、このことは、コミュニケーションの心理学的(あるいは、認知的)視点——他者の理解は、人間の内的過程に基づいて遂行されるをえないとする視点——から得られる結論と同じである。テキスト分析や心理学的アプローチに対する社会構成主義の代案は、第11章で述べる。

[9] 今や、述べてきたような議論と軌を一にする文献も大量にあり、「社会構成主義」に貢献する研究者も陣容を盛えているが、伝統的科学的「社会構成主義の後継者」についての議論はあまり多くない。しかし、このプロジェクトについては、次のような重要な業績もある。例えば、Asley (1985)、Edwards and Potter (1992)、Lincoln (1985)、Longino (1990)、Shooter (1993b)、Stam (1990) など。

[10] 行動科学における仮説検証型研究が不毛であるのは、こうした理由による。すなわち、研究そのものは、「客観的事象」の範囲、質問紙の評定のユニークな回答、ボタン押し、写真刺激、などを用いて行われている。しかし、こうした文化的にも時間的にも限定されたミクロなプロセスから得られる結論は、きわめて広範に通用するものとされている。すなわち、科学の文脈では、「攻撃」「精神病理」「推論能力」「知覚」「記憶」などが、一般的で普遍的なものとして語られる。しかしながら、こうした抽象的な結論は、文化的には何の意味もない事象と結びついている。したがって、これらの概念が、社会生活にどれだけ役立つかは、はまだ疑わしい。このことについて、より詳しい議論としては、Sandelands (1990) を参照。

[11] 主体と客体の間のギャップを架橋し、エスノグラフィの形態を拡張しようとする、文化人類学者の最近の試みの集成として、Ranson (1993) を参照。

[12] 同様の議論は、統計論についても当てはまる。この意味で、「個人の頭の中」に文法規則、法則、論理の基盤を求めようとする試みは、間違っている。文法的慣習は、関係性のプロセスの中にこそ、正しく位置づけることができるだろう。

[13] 心理学における理論研究の重要性を——実証という枠を超えて——示すものとしては、Kuhla (1989) を参照。

[14] 同様に、Asley and Zammito (1992) は、社会エンジンニアが基礎的な知識に基づいて政策を適用するという、組織科学の伝統的